

バングラデシュ南部避難民支援事業

大阪赤十字病院 助産師 西本 充子

(派遣期間：2018年8月17日～10月26日)

2017年8月に起きたミャンマー・ラカイン州の武力衝突により、バングラデッシュ南部には約70万人の避難民が新たに流入し、その数は元からの避難民と併せて約90万人と言われています。その多くが1年経過した現在もなおキャンプ内で暮らしており、厳しい生活の中で妊娠・出産・育児を行う女性が多く存在します。

日本赤十字社は昨年9月から医療支援を開始し、現在は避難民キャンプ内のクリニック（右写真）でバングラデッシュ赤新月社の医療スタッフと共に外来診療を行っています。本院も、先遣隊から現在に至るまで、すでに25名の職員を派遣しています。



日赤のクリニック外観

私は助産師として約2か月間、バングラデッシュ赤新月社の助産師と妊婦健診・新生児健診・家族計画指導（避妊方法など）を行いました。

私の活動の中心となったのは妊婦健診です。ほとんどが20代の妊婦で、初めてのお産が18歳前後という方が多くみられました。イスラム教を信仰する彼らにとって子どもは神からの授かりものといわれます。今回の妊娠に至るまで4-5人の出産を経験している方も多く、中には9人目の妊娠と話される方もいました。また、出産は親族や伝統的産婆といわれる付添人の介助によって自宅でお産することがほとんどで、妊娠中から順調な経過をたどっているかを見守ることが助産師の重要な役割となります。

日本では当たり前になっている妊婦健診ですが、キャンプ内では妊婦健診の習慣がありません。また、女性が外出するために夫の許可が必要であることや男性の医療者がいることを心配して受診をためらう方もいると聞きました。

お母さんも赤ちゃんも元気に安全に出産できるよう「一人でも多くの方に妊婦健診に来てほしい」という思いから「男性にも妊婦健診の大切さを知ってもらいたい」と考えました。

そこで、毎月開催されるクリニック周辺地域の男性が集まる会議で助産師の活動について説明しました。その日集まった男性は40名以上。女性が大勢の男性の前に立って話すことは珍しいようで、彼らの私を見る目が厳しく感じ、とても緊張したことを覚えています。



勉強会の参加者



妊婦のイラストを用いて説明する様子

妊婦さんのイラストを示しながら通訳を介して説明するうちに徐々に場が和み、イラストを見せてほしいという出席者もみられました。

次に考えたのは、クリニック内での啓蒙活動です。日本の病院では掲示物をよく見かけます。しかし、キャンプ内の患者さんの多くは文字が読めません。そこで、診察を待っている患者さんに助産師からのメッセージを伝えることにしました。人前で話すことを恥ずかしがっていた助産師も少しずつ堂々と話すことが出来るようになりました。また、当初彼女らはどうしても女性に向かって伝える傾向がありましたが、ここでは決定権は男性が持っていること、男性の理解がなければ必要な人に伝わらないことを繰り返し助産師に説明することで、男性にも直接伝える場面も見られるようになりました。そして中には、娘が妊娠中だからクリニックに連れて来るよと伝えてくれる男性もいました。



待合室でお知らせを伝える助産師

その他、クリニック内で働くスタッフのほとんどは男性であることから、勉強会では妊

婦健診をテーマにしました。健診の大切さだけでなく「妊婦健診で何をするのか/何が分かるのか」を知ることが、安心して女性に受診を勧めるきっかけになるかもしれないと考えたからです。診察室での状況が分かりやすいように医療スタッフが助産師・妊婦の役を演じてロールプレイ形式で健診の流れを再現しました。はじめはふざけた様子に見えた参加者ですが、赤ちゃんの正常な向きや逆子がなぜ危険なのかをイラストを用いて説明することで頷きながら話を聞く参加者もいました。



胎児心音聴取のシュミレーションの様子

その後、クリニックの近くの伝統的産婆との連携を図るために自宅を訪問すると、その夫が私のことを覚えていると言われ驚きました。詳しく話を伺うと、前月の会議に出席していたこと、妊婦健診が重要だと知り地域の妊婦に伝えてしていると話されました。ただ、大切さは伝えているが男性医療者がいることや夜間は受診先が分からないことなどを理由に医療機関の受診に消極的だと話されました。それに対しては、命より大切なものはないこと、女性医師を待ってたらその間に命が亡くなってしまうと伝えていと教えてくれました。文化や宗教的価値観の違いから医療に対する壁が存在するものの、伝えたいメッセージが現地の人を通して一人でも多くの方に伝わっているということが分かり嬉しく思いました。

もう一つ、嬉しいお知らせがクリニックに届きました。

ある日、新生児健診に来た赤ちゃんとお母さんに付き添って、お祖父さんが診察室に入ってきました。男性の立ち入りはお断りしていることを伝えようとしたのですが、大きい声で何かを話し続け、周りのスタッフも何事かと診察室に集まってくる事態になりました。通訳を介して事情を伺うと、少し前に妊娠 8 か月で意識消失とけいれん発作のため緊急手術が可能な病院に救急搬送した妊婦さんがいました。その妊婦さんがこのお母さんだということでした。お祖父さん



「新生児健診に来た母児とお祖父さん。何度も「シュクリア」（現地語でありがとうの意味）と話されていた」

は「娘と孫の命を助けてもらった。ありがとう。」ということを私たちに伝えていたのです。

生後 40 日経った赤ちゃんは、早産のためやや小柄ではありましたが、健康状態は良好でおっぱいも良く飲んでくれるということでした。

初めての派遣ということもあり緊張の初日から、普通の病院の医療現場とは違った状況を見て「どうしよう…」と悩まない日はなかった約 2 か月間でした。しかし、いつも相談に乗ってくださった同じチームのスタッフの方々・心強いお言葉で送り出して下さった大阪赤十字病院のスタッフの方々のお陰で、前向きに様々な取り組みを行うことが出来ました。

文化が違う・環境が違うという点で迷ったことはたくさんありました。しかし、「患者さんのために何が必要か？」を考えることで方向性が見えてきた経験は、国が違って医療者として最も大切なことは「患者さんをいちばんに考えること」だと改めて気づかせてくれました。そして、それは看護とは何かを初めに習ったときに教わった基本的なことでありました。これらの経験を今後も臨床現場に活かしていきたいと思います。

最後に、日本赤十字社の活動にご支援くださる皆様に心から感謝申し上げます。

※国際赤十字では、政治的・民族的背景及び避難されている方々の多様性を配慮し、「ロヒンギャ」という表現を使用しないこととしています。